

黄色ブ菌：(*Staphylococcus aureus*, 葡萄の、黄金色) は通性嫌気性のグラム陽性菌で黄色色素を産生する。カタラーゼ、コアグララーゼ、プロテアーゼを産生、マンニトール、ブドウ糖を分解（酸素は不要）。10%食塩も OK。人の皮膚、腸内に常在する菌の中では毒性が高く、エンテロトキシン（食中毒）や TSST-1（毒素性ショック症候群：タンポン使用と関連か？）など外毒素を産生する。黄色ブ菌とそれ以外のブ菌はコアグララーゼ産生能や解糖能で判定。コアグララーゼは血漿を凝固させるので、白血球が接触しにくい。通常 β ラクタム環が有効なので MSSA とも。MRSA：1980 年代中頃から CDC の MMWR に抗ペニシリナーゼ抵抗性黄色ブ菌がリポートされるが、日本では高価なセファロスポリンの使用が多く注目されなかった。米国ではペニシリン分解酵素（ β ラクタマーゼ）に抵抗性を持つ安価なメチシリンが大量に使用された。その後全ての抗ペニシリナーゼペニシリンに耐性があることが判明、パニックとなった。これで日本では使用されなかった **Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus*** の名前が定着。耐性の原因は β ラクタマーゼではなく MRSA は黄色ブ菌の持つ 4 つの細胞壁合成酵素（**Penicillin Binding Protein 1-4**）とは異なる PBP2' をもち SCCmec（と呼ぶ DNA 断片）上にある *mecA* 遺伝子（1,2,3 型）にコードされた PBP2' が β ラクタム環と親和力を持たないため。MRSA の確定診断には PBP2' あるいは *mecA* の検出（市販の試薬あり）。院内感染型(hospital-acquired) MRSA と市中感染型(community-acquired MRSA) HA-MRSA はわれわれが日常接触するもので、ST 合剤やリファンピシン、バンコマイシン、ダブトマイシン、リネゾリド、ストレプトグラミンなど以外に感受性を持たないが、毒性は低い（第 5 世代セファロスポリンは MRSA に有効、2010 年 FDA 認可）。1997 年に報告された健常人の CA-MRSA 感染症は毒性が高く壊死性肺炎、敗血症など致命的なものもあり、PVL という白血球殺毒素を産生する（*mecA* 4,5 型）。ダラシン、ミノマイに感受性をもつ。日本の CA-MRSA はほとんど PVL(-)。新生児には新生児 TSS 様発疹症、ブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群など MRSA が原因と考えられる致命的な疾患があるので、MRSA からの厳重な隔離が必要。CoNS あるいは CNS：コアグララーゼ産生(-)のブ菌（**Coagulase Negative *Staphylococci***）。主に表皮ブドウ球菌(*Staphylococcus epidermidis*)はほとんどが耐性なので MRSE、他 14 種類(白色ブ菌とも)。中心静脈栄養カテ感染で血培がグラム(+)球菌はまずこれ考える（次はカンジダ）。本来非病原性の善玉菌、皮脂をグリセリンと脂肪酸に分解、保湿と弱酸性化により表皮を健康に維持する作用がある(これがないと大惨事!)。CNS は多剤耐性菌が多いので CMDT(2003 年)は血液培養で、カテ、人工弁にまつわる CNS による血液感染が確認された場合は直ちにバンコマイシンとゲンタマイシンの併用、原因除去、不可能な場合は 6 週間の投与を勧めている(高腎毒性)。他に VRSA (Vancomycin-resistant *Staphylococcus aureus*) (バンコマイシン耐性黄色ブ菌)、VISA (Vancomycin-intermediate *Staphylococcus aureus*) (バンコマイシン軽度耐性黄色ブ菌)、hVISA (Heterogeneous Vancomycin-intermediate *Staphylococcus aureus*) (ヘテロ耐性黄色ブ菌) 等。